

【令和4年度実績】

1. 展示や各種企画を通じた大学の研究成果・学術資源の公開による社会貢献事業

「社会との共創」

No.06 (2)-4「社会とともにある大学」としての社会連携の強化, No.07 (2)-5 戦略的ファンドレイジングの展開と支援者とのネットワーク強化, No.30 (2)-3 文化・学術資源の発信, No.44 (1)-2 東北大学ブランドを高めるための戦略的広報の強化

実績報告

1) センターの展示公開施設は、大学の行動指針(BCP)に合わせたセンターの感染症対策ガイドラインに従い、感染症対策を徹底して、展示公開施設の開館を継続することができた。

センターとして、展示公開施設に対する文化庁の補助金に申請し補助を得て、新型コロナウイルス感染症対策を強化した。令和3年度文化芸術振興費補助金(文化施設の活動継続・発展等支援事業)として、1,544,000円の交付を受けた。この補助金を活用し、各館園の対策の強化やオンラインを行った。オンライン企画やYouTubeを利用した企画を推進した。

総合学術博物館では、YouTube公式チャンネルを開設(2021年6月より)後、標本館内の展示関係動画や仙台の地質に関する動画を定期的に配信してきた。2023年2月現在まで25本配信済み。また、博物館公式Twitterも着実にフォロワー数が増加しており、2023年2月の時点で700ツイート、1948フォロワーとなっている。これらの取り組みにより、総合学術博物館のホームページ訪問者数が昨年度でコロナ前の約1.5倍の301,504件となり、今年度はさらに増加して311,759件に達した。

植物園では、文化庁補助金を活用し、天然記念物「青葉山」のドローンによる空撮動画やGoProを活用した園内や植物の動画の撮影と編集を進めた。また、キャッチーなコンテンツ制作のため、一部の動画は業者に制作を依頼した。今年度末に植物園のYouTube公式チャンネルを開設し、これらの動画をアップロードする予定である。

史料館では、コロナ禍においてキャンパスに来られない学生や同窓生のために、東北大学公式サイト上に、東北大学キャンパスガイドを開設すると共に、コロナ禍のキャンパス定点観測撮影を災害研とともに継続して実施している。合わせて職域接種の記録撮影等、COVID-19に関する東北大学対応記録のアーカイブ事業を展開した。

2) 創立115周年・総合大学100周年の周年事業の一環として、センターでは本部総務企画部と連携し、片平地区旧金研10号館(放送大学として2・3階使用)1階に、東北大学の歴史、学術成果を紹介する「東北大学ギャラリー ひすとリア」を開設した。また西澤潤一記念資料室(旧半導体研究所1階)に書齋および蔵書書架を再現、展示機能の拡充を図り、特別一般公開を実施した(9月30日～11月3日)。

総合学術博物館では、周年事業の一環として、総合大学となった時点の総長である小川正孝を紹介する企画展示「小川正孝—その研究と生涯—」(会期:2022年10月1日～2022年11月6日 会場:自然史標本館展示室2F)を、理学研究科・史料館と共催で開催した。

史料館では、「東北考古学の礎－東北大学奥羽史料調査部から現在へ」(9/1～12/23)、「阿部次郎記念館新規資料及び法文学部開設関係資料公開展示「阿部次郎と法文学部」」(10/1～12/24)については、文学研究科と共催した周年事業企画展示として実施、2548名の来場者は、直近5年間で最大の来館者数となった。

3) 総合学術博物館では、感染症対策を考慮し規模の大きな企画は難しかったが、展示企画や改修を連続して実施した。

ミニ展示コーナーを新たに開設し、「宮城県で採れる鉱物 Part 3 大和町宮床・玉髓」(5～6月)、「宮城県内で採れる鉱物 Part 4 丸森のペグマタイト鉱物」(7月～12月)、「宮城県内で採れる鉱物 Part 5 加美町宮崎鉱山・石膏」(1月～)をそれぞれ実施した。

主催事業としては、上記小川正孝展意外に、次の事業を実施した。「宮城の化石展～宮城と富谷の古生物～」(会期:2022年7月26日～9月4日、会場:富谷市民俗ギャラリー、富谷市教育委員会との共催)、公開シンポジウム「チバニアン、学術的意義とその社会的重要性」(会期:2022年5月24日、会場:日本学術会議、日本学術会議地球惑星科学委員会 IUGS 分科会、地球惑星科学委員会地球惑星科学国際連携分科会 INQUA 小委員会との共催)。

4) 史料館では、周年事業として実施した上記展示を含め、常設展示・企画展示合わせて15件の展示を展開した。また、一昨年度寄贈を受けた西澤潤一関係資料の本格的なデータベースが完成し、合わせて附属図書館と協力し保存公開についての保管環境を整備した。西澤潤一関係資料は、晩年の記録だけでなく、学生時代からの膨大な資料が遺されており、研究資料のみならず、卓越した研究の知的基盤そのものを解明すべく、バイオグラフィーから位置づけるアーカイブ構築を進めた。この成果は、西澤潤一記念資料室の展示拡充に活用した。

5) 史料館では、旧制二高同窓組織と連携した取り組みを行い、明善寮・旧制二高関係者からなる新規同窓組織:蜂萩会の萩友会と連携し、旧雨宮キャンパスから片平キャンパスへの史跡移設(粟野観音等)および顕彰イベントを実施した。

 [図1 西澤記念資料室特別公開.pdf](#),  [図2 小川正孝展.pdf](#),  [図3 東北考古学の礎.pdf](#),  [図4 阿部次郎と法文学部.pdf](#),  [図5 宮城と富谷の古生物.pdf](#)

2. 大学の有する自然環境・歴史的資源の保全と活用を通じた社会連携の強化

「社会との共創」

No.06 (2)-4 「社会とともにある大学」としての社会連携の強化, No.07 (2)-5 戦略的ファンドレイジングの展開と支援者とのネットワーク強化, No.30 (2)-3 文化・学術資源の発信, No.44 (1)-2 東北大学ブランドを高めるための戦略的広報の強化

実績報告

1) 2022年度の東北大学創立115周年・総合大学100周年事業にあたりセンターでは、キャンパス資源活用の取り組みについて関係部局と連携して検討を進めてきた。創立115周年記念事業

実行委員会、総合大学 100 周年記念事業部会への委員参画、広報部会の副部会長を務めるとともに、史料館では専任教員が記念事業を担当する総長特別補佐として創立 115 周年・総合大学 100 周年の周年事業に貢献した。

周年事業の一環として、以下のキャンパス資源活用事業をセンターとして実施した。

○デジタルデータとリンクしたキャンパス資源の可視化

QR コードからセンターWEB ページ掲載の関連コンテンツ表示を閲覧する事業を、歴史的建造物・記念碑や樹木について実施した。片平地区の登録有形文化財全 13 件を 360 度の VR としてデジタル化し対面のキャンパスツアーと連動するデジタルツインのモデルを構築した。片平キャンパスにある旧理学部生物学科樹木園、仙台市保存樹木、学内の名木などの樹木に、ウェブ情報とリンクした QR コード付きの説明ラベルを設置し可視化を図った。

○登録有形文化財の紹介事業

登録有形文化財である本部棟 7 に開設された「東北大学ギャラリーひすとりあ」を拠点として、登録有形文化財紹介キャンパスツアー(10 月 2 日)、秋の片平植物ツアー(11 月 12 日)を開催した。

○川内千貫沢遊歩道整備と学内有志ボランティア組織

学内外の人材によるキャンパス資源活用の枠組み形成として、川内南キャンパスの千貫沢に遊歩道を仮整備し、学内有志ボランティアの組織化を図った。

2) 史料館では、「東北大学ギャラリーひすとりあ」の整備に合わせて、本部棟 3 魯迅ラウンジのスペースに新たな展示空間である、階段教室展示ルームのリニューアルを行い、史料館本館においても大型プロジェクターを設置するなど、各種登録有形文化財の展示機能を強化、キャンパスツアーのルート構築とともに登録有形文化財に登録されている、魯迅の階段教室と一体的な観覧性を高め、学内歴史的建造物のアウトリーチ体制を強化した。また、萩友会関西交流会に際し、昨年引き続き大学史に関する特別講演を企画実施し、基金・校友事業室と協力して校友アイデンティティの創出に積極的に寄与した。

3) 植物園では、片平キャンパスの樹木への QR コード付きの説明ラベルの設置に際して、旧理学部生物学科樹木園の樹木調査を実施し、樹木マップを作成し樹木ツアーにおいて活用した。また、青葉山公園を中心に開催される第 40 回全国都市緑化仙台フェア(2023 年 4 月 26 日～6 月 18 日)の連携会場として協力し、開催機関中の 4 月 29 日と 5 月 4 日に実施する、教員による公開講座、植物園内のガイドツアーを実施すべく準備を進めた。

4) 植物園では、天然記念物再生事業(国庫補助事業、2019 年度より 5 年間)を実施し、天然記念物「青葉山」におけるナラ枯れ抑制と安全確保のため、各種事業を実施し、その保全に努めた。2022 年 7 月には文化庁の担当調査官の視察を受け入れ、事業に対して高評価を得た。

 [図6千貫沢遊歩道.pdf](#)

3. 独自性を活かした復興支援・震災記録事業の推進・展開

「社会との共創」

No.10 (1)-3 先進的 ICT を活用した教育基盤の構築, No.26 (1)-1 科学的知見に基づく国際貢献と廃炉の推進を通じた地域への貢献

実績報告

1) センターでは、人間文化研究機構が中心となり東北大学・神戸大学との3者で実施される歴史文化資料保全ネットワーク事業の第2期事業(2022～2026年度)に、第1期事業に引き続き参加し、歴史文化資料の防災のための、教育プログラム開発を担当している。今年度は、関係機関との連携体制構築や、博物館等の防災対策の現状調査を実施した。

2) 総合学術博物館では、東日本大震災の震災遺構の3次元デジタルアーカイブデータを WEB 配信し、オンラインで利用する方法の検討と試行を行った。高分解能X線CT設備(学内共同利用)を活用し、学内外の機関の多様な分野の研究者との共同研究を継続して実施した。その成果の一部は、「第一回国際シンポジウム メタバース・XR 技術の教育利用と国際共創」(東北大学 知の創出センター主催)において、VR を用いて紹介した。

南三陸町の里海里山ウィークス実行委員会主催の「里海里山ウィークス 2022」(2022年10月8日～10月16日)の一環として、みなみさんりく発掘ミュージアム・南三陸 YES 工房と企画し、「南三陸の『化石マスター』になれる2日間のツアー」(2022年10月8日～10日)を実施し、南三陸の地質資源に関する普及活動を行った。

3) 史料館では、2023年度に開館する仙台市公文書館の運営検討会議に史料館教員が座長として関わることを通じて、官学連携した東日本大震災と公文書管理に関する記録の収集選別基準の策定を進めた。さらに岩沼市において新たなアーカイブ機能について検討する、岩沼市史収集資料保存活用等検討会でも、史料館教員が副委員長と務め報告書を提出するなど、地域自治体における震災公文書の保存継承に主導的な役割を果たした。

4. 公文書管理による大学運営への貢献

「業務運営の改善等」

No.44 (1)-2 東北大学ブランドを高めるための戦略的広報の強化, No.46 (1)-2 全学 DX によるデジタル・キャンパスの推進

実績報告

1) 本部事務機構の協力の下、現用・非現用のライフサイクルに基づく適切な公文書管理と評価選別・移管を実施し、歴史公文書の保全に努めた結果、本年度は国際標準6%を越える移管率10.2%を達成した。

2) 史料館では、第21代総長期の12名の執行部に関するデータベース化を進めると共に、理事事績ヒアリングを実施した。また東北大学の理念の形成過程について、総長級に関しては、これまで資料が散逸していると思われていた第5代総長井上仁吉の資料群を増補し、周年事業に資

する本学の歴史継承のためのアーカイブ化を実施した。さらに西澤潤一元総長の関連資料を再整理し、西澤記念資料室の展示拡充をおこなった。

3) 史料館では、2022 年度に設置された東日本の国立大学で初となるアーキビストの教育養成プログラム「認証アーキビスト養成コース」の設置において、文学研究科、法学研究科、災害科学国際研究所、学際科学フロンティア研究所と連携し、主体的な役割を担い、同コースの制度設計をおこなった。また 12 月 3 日には、認証アーキビスト養成コース開設記念シンポジウム「アーカイブズ専門職拡充と大学の役割」を文学研究科と共催して実施、アーキビスト養成に関わる全国5大学が揃う初のシンポジウムとなった。

 [図 7 認証アーキビスト講座.pdf](#)

5. 先端技術を活用した学術資源利用の促進

「研究」

No.18 (1)-1 自由な発想に基づく基礎研究の推進および新興・分野融合研究の開拓, No.28 (2)-1 国際共同利用・共同研究拠点及び共同利用・共同研究拠点の機能強化

実績報告

1) 総合学術博物館では、東日本大震災の震災遺構の3次元デジタルアーカイブデータを WEB 配信し、オンラインで利用する方法の検討と試行を行った。高分解能X線CT設備(学内共同利用)を活用し、学内外の機関の多様な分野の研究者との共同研究を継続して実施した。

2) 史料館では、東北アジア研究センターとともに、地域研究デジタルアーカイブの構築に協力し、37、112 件のデータベースからなる、「地域研究デジタルアーカイブ」を国際的な画像共有の枠組みである IIIF で公開するとともに、新たに年度末までに 2 コレクションを増補した。さらにハーベスティング機能を新規に実装し、日本最大級のデジタルアーカイブポータルである国立国会図書館ジャパンサーチと正式に連携した本学初の研究センターとなった。

3) 史料館では、附属図書館と連携して「総合知デジタルアーカイブ」の仕様構築に寄与した。総合知デジタルアーカイブは学内のデジタル化された学術資源を蓄積・統合、本学のアーカイブポータルとして公開し、学術資源の国際発信を目指すもので、最新のソフトウェア技術や国際的な規格に準拠し、国際的に発信・利活用できる機能を備えた本学初の本格的なデジタルアーカイブシステム計画となっている。

4) 植物園本園の天然記念物指定範囲は、環境省のモニタリングサイト 1000 事業の準コアサイトとなっており、今年度も植生概況調査、陸生鳥類調査、甲虫調査を実施した。これらの成果の一部は、環境省モニタリングサイト 1000 の HP (<http://www.biodic.go.jp/moni1000/index.html>) で随時発信されている。

5) 植物園では標本庫に収蔵されている 15000 件のさく葉標本のデータを、国立科学博物館が運営する S-net(サイエンスミュージアムネット、<http://science-net.kahaku.go.jp>) を介して、GBIF(地球規模生物多様性情報機構、<https://www.gbif.org>) へ提供した。GBIF は、自然史標本デ

ータおよび観察データを中心に、世界の生物多様性情報を共有し、誰でも自由に利用できる仕組みを構築することを目指した取り組みである。これまで国内の博物館・研究機関 104 機関が自然史標本情報を提供しているが(575 万件:2020 年 10 月現在)、東北大学から同機関への標本データの提供は昨年度に開始され、今年度は、昨年度(7000 件)の倍以上のデータを提供した。

6. 教員の研究時間確保に係る取組

「教員の研究時間確保」

No.46 (1)-2 全学 DX によるデジタル・キャンパスの推進

実績報告

センターを構成する総合学術博物館、植物園、史料館の各組織では、各キャンパスに分散しているため、対面で行う必要の無い会議・打合わせは基本的にオンラインで実施している。センター3施設間での会議・打合せも基本的にオンラインで実施している。このことによって教員の移動負担軽減がはかられており、研究時間確保につながっている。

史料館は、必要に応じて教員に実務業務が入らない研修日設定を行い運用しており、研究時間の確保に努めている。